令和６年９月 14 日（土）

花巻市太田第 27 地割所在

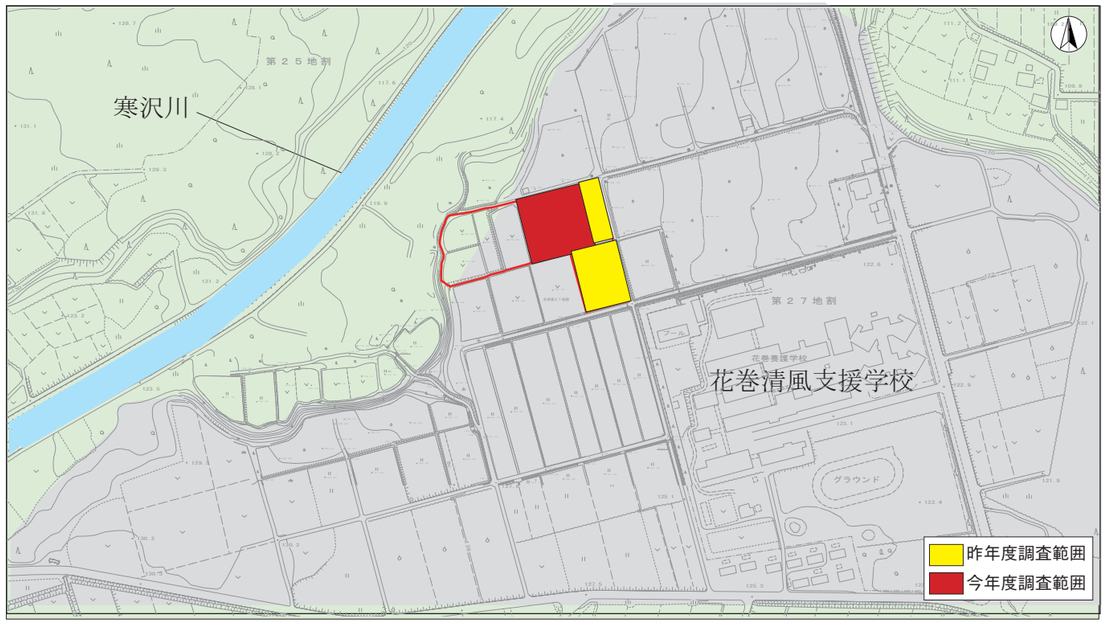
折居（おりい）遺跡現地説明会資料

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

はじめに

折居遺跡は、豊沢川の支流である寒沢川の南に広がる段丘上に立地しています。一帯では土器や石器が多くみつかるため、以前から縄文時代の遺跡であることは知られていました。一般的に縄文時代は、時期の古い方から草創期・早期・前期・中期・後期・晩期と区分されます。竪穴住居で暮らし、縄文土器や石器を使い、狩猟・漁撈（ぎょろう）・採集を基本とした生活が１万年以上も続いたとされています。

今回は、岩手県県南広域振興局農政部による「農業競争力強化基盤整備事業」に先立ち、遺跡の記録を後世に残すために発掘調査をおこなっています。昨年度から調査を開始し、冬季の休止期を経て、今年度は６月から 3,300 ㎡を対象に（下図赤塗り範囲）調査を再開し、現在も調査を継続中です。



折居遺跡周辺の地形（縮尺 1:5,000）

調査でわかったこと（遺構と遺物）

遺構とは、過去の人々が地上に残した痕跡のことです。縄文時代の遺跡では、しばしば竪穴住居、動物を狩るための陥（おと）し穴、食料貯蔵穴、お墓などの遺構がみつかります。昨年からの調査で、40 棟近くの竪穴住居がみつかり、調査地点が縄文時代に営まれた大きな集落の一角であったことがわかりました。この集落の中心となる時期は縄文時代前期（約 5,500 ～ 5,000 年前）で、岩手県各地で集落遺跡が増え始める頃にあたります。折居遺跡の人々も大小の竪穴住居で暮らし、縄文土器や石器を使って生活していました。集落内には住居以外に貯蔵穴やお墓などの穴もみられます。

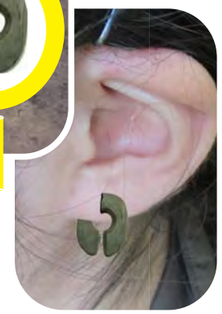
今回の調査地点では、東西にのびる低地部分をはさむようにやや高い地点に竪穴住居がみられます。縄文時代の人々が、水はけの良い場所を選び、長い期間そこに住み続けた結果をみることができました。

一方、水はけのあまり良くない低地部分には、不要になった遺物がたくさん捨てられていました。

小さな竪穴住居

長大な竪穴住居

玦状耳飾の出土状況



耳飾の使用想定

柱穴のある土坑

縄文土器（前期）出土状況

両端が打ち欠かれた大小の石錐

石棒

遺物は当時の人々が使った土器や石器などです。出土した縄文土器は、縄文時代前期の土器が大半ですが、中期・後期・晩期の土器も少量みられます。前期より後の時代も周辺に集落があった可能性が考えられます。石鏃（せきぞく）や石斧（せきふ）などの石器のほか、石錘（せきすい）と呼ばれる簡素な魚網（ぎょもう）の錘（おもり）は特に多く出土しています。近くの川で網を用いた漁が盛んだったのかもしれません。また、お墓とみられる穴の底では、玦状耳飾（けつじょうみみかざり）と呼ばれる装飾品も出土しており、当時の風習や精神性を知る手がかりとなりそうです。

まとめ

折居遺跡では、縄文時代前期に営まれた大集落の一部がみつかりました。当時使用された遺物も多く出土しており、縄文時代の生活や文化を知る貴重な成果が得られました。まだまだわからないことも多くありますが、調査後の整理作業を通じてこの集落のようすを明らかにしていきたいと思います。

折居遺跡全景オルソ画像（2024・2023 を合成）　＊渡邊土地家調査士事務所提供